

青山学院女子短期大学同窓会四国支部卒業生 聞き取り調査のまとめ －1965（昭和40）年から1972（昭和47）年卒まで

河見 誠

1. はじめに－本稿の内容と目的

昭和40年代（1965-1974年）は、経済的には高度成長期のピークを迎え、政治的には70年安保闘争が生じ、またいわゆる「ウーマンリブ」（女性解放）運動が登場してくる時代である。戦後日本社会が大きく変化していく10年と言えよう。聞き取り調査第2期（2023-2024年度）においては主に、この時期に学生生活を過ごした青山学院女子短期大学（以下「青短」という）卒業生に聞き取りを行った。

四国支部における聞き取り調査においては、昭和40年代卒業生はこれまで9名いらっしやった。そのうち第1期（2021-2022年度）に聞き取りを行った卒業生が2名おり、1965（昭和40）年卒の1名については本年報第3号における第1期報告の中で取り上げたので、今回の報告においては、第1期のもう一人の卒業生と第2期の7名、計8名（以下の一覧表）から聞き取らせていただいた内容をまとめる。卒業時期は1965（昭和40）年3月卒から1972（昭和47）年3月卒までである。

本稿では、この世代の卒業生の短大入学までの経緯、学生時代の経験、進路が、それ以前の世代とどのような共通点、相違点を持っているかを示す。そして、青山学院の創始者の一人であるドーラ・E・スクーンメーカー宣教師の「しなやかに夢を生きる」生き方の継承という観点から、卒業生の歩み（ライフストーリー）をまとめる。そのことを通して青山学院の女子教育の特徴と意義の一端を明らかにしたい。

	卒業年	学科	居住地	出身地
A	1965（昭和40）年	英文	高知県	高知県
B	1968（昭和43）年	家政	愛媛県	愛媛県
C	1968（昭和43）年	国文	愛媛県	愛媛県
D	1969（昭和44）年	国文	愛媛県	愛媛県
E	1969（昭和44）年	英文	香川県	栃木県
F	1970（昭和45）年*	家政	香川県	香川県
G	1972（昭和47）年	教養	高知県	高知県
H	1972（昭和47）年	英文	香川県	香川県

※1971（昭和46）専攻科家政専攻卒

2. 女子の進路選択の変化

2.1 女子の高等教育進学率の増加

1965（昭和40）年卒のA（高知学芸高校）によれば「女性の進学はまだ少なかった」という。これに対し、1970（昭和45）年卒のF（高松高校）は「進学するのは当然の環境だった」、1972（昭和47）年卒のH（高松高校）も「進学校では女子もほとんど大学に行く」と回想している。高校卒業年度でいうと昭和30年代末から昭和40年代半ばの数年間におけるこの相違は、主観的印象や地域の違いによるものではなく、この時期に顕著に現れる進学率の上昇によるものであろう。

この3名の高校卒業年度（昭和37年度、42年度、44年度）の全国的女子進学率を見ると、大学短大計7.4→13.4→16.1%、大学3.3→4.9→5.8%、短大4.1→8.5→10.3%と7年で倍増している。昭和40年代全体としてみた進学率の増加は急激であり、昭和49年度（1974年度）高校卒女子の進学率は、大学短大29.8%、大学11.6%、短大18.2%に至っている。（因みに男子の進学率は、大学短大18.1→22.2→26.6%、昭和49年度には40.5%に増加している。）

	大学・短大	大学	短大
	女（男）	女（男）	女（男）
昭和37（1962）年度	7.4（18.1）	3.3（16.5）	4.1（1.6）
昭和42（1967）年度	13.4（22.2）	4.9（20.5）	8.5（1.6）
昭和44（1969）年度	16.1（26.6）	5.8（24.7）	10.3（1.9）
昭和49（1974）年度	29.8（40.5）	11.6（38.1）	18.2（2.4）

「学校基本調査」（進学率）より

確かに全体ではまだ女子の大学・短大進学率は、昭和44年度でも16%である。しかし聞き取り対象者の卒業高校が進学校であることからすると、女子の高等教育への進学傾向は全体の数字以上の大きな流れとして現れていたと考えられる。四国におけるこの趨勢は全国的なものであっただろう。

しかし同時に、F、Hの出身校である高松高校（男子の旧高松高校と高松女子高等学校が統合）でも当時就職クラスが1組あった。他方、逆に1969（昭和44）年卒（高校は昭和41年度卒）のDが卒業した県立松山南高校（元松山高等女学校を前身とする）は、「少し前に就職のコースがなくなった」という。昭和40年代は女子の進路に関する転換点であったことが分かる。

2.2 短期大学か四年制大学か

A（1965〔昭和40〕年卒、高知学芸高校）は「四年制大学に行きたかったが、四大卒は就職が難しいと言われ短大」を選んだという（学費の負担も理由に含まれる）。それ故、

同志社大学にも合格したが、青短に進学した。なお東京で受験したのは青短だけだった。実際、第1期調査で聞き取りしたように、昭和30年代後半当たりから、高知では短大卒が銀行に採用されるようになったという。⁽¹⁾ 短大を選択したのは、このような就職面の有利さに加え、周りから「短大の方が四大より難しい」と言われたことも、選択の契機になったと述べている。

E (1969 [昭和44] 年卒、宇都宮女子高校) は「当時短大は人気があった」、H (1972 [昭和47] 年卒、高松高校) は高校の進路指導の際、「短大の方が難しい」と言われた、という。昭和40年代中盤になると就職環境の変化（但し結婚をめぐるライフコースモデルは不変化）と相まって、女子の進学率が上昇し、短大人気が益々大きくなっていったことが窺われる。

このようにこの時期、女子の高等教育、特に短期大学への進学の方が大きく開かれていくのであるが、その際、四大短大の選択もかなり自由に許されるようになってきた。C (1968 [昭和43] 年卒、今治西高校) は「父も二年制でいいと言われたが、自分の意志で大学も受けた」、H (1972 [昭和47] 年卒、高松高校) は「大学受験の日がシオン寮の入寮面接と重なってしまったので寮には入れなかった」と語る。

2.3 県外、東京への進学

それでは地元を離れることに関する制約の変化はどのようなものであったか。A (1965 [昭和40] 年卒、高知学芸高校) は「東京への進学者も多かった」、F (1970 [昭和45] 年卒、高松高校) は「両親は上京に全く反対しなかった」、G (1972 [昭和47] 年卒、土佐女子中高) も「親は何も言わなかった」、H (1972 [昭和47] 年卒、高松高校) は「東京に行くことも珍しいことでは無かった」とする。

ただ、四大なら地元、という意向を持つ家庭も多かったようである。D (1969 [昭和44] 年卒、松山南高校) は「四年制なら愛媛大学にしてくれと母に言われた。帰ってこなくなることを恐れてのことだった」。そして依然として厳しい制約がある家庭もあった。B (1968 [昭和43] 年卒、丹原高校) の父は女の子は四年制はダメ、「一日も早く嫁に行った方が良く」という考えで、半強制的に短大の家政科に進学したという。但し、それでも短大進学、しかも県外（姉二人は京都の短期大学家政科に進む）さらには上京を認めていることは、時代の大きな変化と言える。

3. 学生時代について

3.1 入学後の変化・影響

「Q2 青短に入学して何かご自身に変化はありましたか。何か影響があったとしたらどんなことですか」という質問に対して、変化は特に思いつかない、という人が複数（3名）

いた。その中には親の出身が東京だったり、家族や親戚が東京圏に在住しているケースがある (C、F)。しかしそれらの場合でも、続けて語られる内容、また「Q 3 特に記憶に残っていることについて教えてください」という質問に対する回答とあわせてみると、短大での時間、とりわけ教員との出会いが確かな影響を与えていることが見えてくる。以下、Q 2 への直接的回答と Q 3 に出てくるいわば間接的・回答において語られた「入学後の変化・影響」を、項目に整理する形でまとめてみよう。

(1) シオン寮とキリスト教：A (1965 [昭和40] 年卒、英文) は、Q 2 で「変化はあまり思いつかない」としつつも、続けて、シオン寮 (第二寮) 朝夕の礼拝を通して、根底にキリスト教の教えが入ってきたことはよかった、と語る。小学生の頃、日曜学校に通っていたという背景もあり、強制ではないが、寮では大体行くものだとなっていたので、日曜日は大学の教会へ出席していたという。そこで培われた愛と奉仕の精神が、A の後ほどの歩み (日本語教師へ) に確かな影響を与えたのではないかと考えられる (4.2 (1) 参照)。

B (1968 [昭和43] 年卒、家政) は、Q 3 の中で、やはりシオン寮とキリスト教のことを挙げている。最初金王町第一寮に入ったが、夏休みまでで、その後猿楽町の新しいシオン寮に移る。中庭の向こうに教会があり、そこで入寮式をした。その雰囲気がよくて、青山に来てよかったと思った、と言う。キリスト教に接したのは寮の朝夕の夕拝で、諸行事、お里帰りなどがあり、幸田学長が来られて一緒にフォークダンスを踊ったりしたことも懐かしむ。キリスト教には寮に入って初めて触れたのだが、学生時代、「シオン寮からの通学途中、『何で賛美歌が浮かんでくるんだろう！』って思うぐらい、口ずさむのはほとんど賛美歌だった」、と振り返る。

キリスト教の授業がとてもよかったことは記憶にある、子どもはミッション系の幼稚園に入れて日曜学校にも出席したという F (1970 [昭和45] 年卒、家政) はシオン寮生であった。キリスト教教育、とりわけシオン寮の教育寮の影響は大きいものであったと言えるであろう。

(2) 学問の府での知的覚醒：G (1972 [昭和47] 年卒、教養) は「初めて学生らしい講義を受けることが出来たこと」を変化として即座に挙げる。これは、後述 (4.2 (8)) のように、授業そして教員 (西洋思想史の小原信先生) の一言がその後の人生に大きな影響を与えたことに基づく発言であろう。他の卒業生においても聞き取り調査全体において、授業、教員との出会いが数多く、具体的に次々と語られた。この点は前の世代と変わることがない青短卒業生の特筆すべき特徴である。

(3) 社会につながる視座：G は、バトミントン同好会において就職した先輩に会い、それまで会社名など気に留めていなかったが少しずつ「社会につながる目」が開かれた気がする、とも語る。女性が社会で働くことについて、実際に働いている先輩から学び、感じ

たことは多いであろう。Gは二年生になって同好会のキャプテンを務める。そこで、女子大の環境だからこそそのリーダーシップも学んだであろう。後述のように卒業後、地元に戻って四国銀行に就職するが、他の銀行とは違い、結婚後も勤められるということで決めたという。「漠然とではあるが結婚しても仕事は続けたいと思っていた」という思いは、入学当初に開かれた「社会につながる視座」が生み出したものではないかと推測する。

また友達を通してセツルメント活動に触れたことも、「社会につながる視座」を広くした経験ということになる。帰省して友達に話したところ（そういう場では大概ボーイフレンドのことが話題であった）、初めて聞いたと言われたということである。セツルメント（貧しい地域に社会改良家が住み込んで人々の生活改善を目指す運動）は四国（徳島）で育ったキリスト教社会事業家賀川豊彦も深く関わる運動であるが、⁽²⁾ 逆にこの時期に上京してこそ得られた社会的知の経験と言えよう。

（４）時代の影響：D（1969〔昭和44〕年卒、国文）は「社会の動きに敏感になった」と言う。安田講堂事件はDの卒業後であるが、東大紛争が始まった頃である。短大の中は穏やかだったが、キャンパスを逃げて走っている人、間違えて短大へ逃げ込む人がいて、卒業式が出来るかという雰囲気もあったという。フォークソングがはやり始めた時代である。昭和40年代半ばの卒業生は、団塊の世代に共通する時代の影響を、直接間接に受けたであろう。

（５）華やかさへの戸惑い：H（1972〔昭和47〕年卒、英文）は「高校まで男女共学で制服だったから、いきなり女子ばかりで華やかな、私服で化粧しているところに放り込まれて戸惑い、とてもやっていけないという感じをもった」と述べる。但し、最初の印象としては驚き、違和感ではあったが、しばらくすると、友達がお化粧していても必ずしも派手な感じはしなかったと言う。確かに「ミニスカート全盛で華やかなファッションの人も多かった」頃であるが（地方から来た人の方が華やかだったという話もあるらしい）、地味なタイプの友人といつも一緒にいたという者もあり（G）、全体的な印象（派手な人が目立つ）が必ずしも実態をあらわしているわけではないということであろう。最近の卒業生からも、入学前のイメージと入学後の実態はずいぶん違っていたという話を聞くことは多い。

3.2 学生時代の記憶

学生時代の記憶は、第1期と同様、第2期でもたくさん語られた。

（１）個別の先生との具体的な思い出の多さ－自宅訪問と深い交流

一年の時から松宮薫子先生のアドグルであったA（1965〔昭和40〕年卒、英文）は、鮮明に先生のことを記憶している。曰く、松宮先生は両親が宇都宮の牧師でアメリカにも留学され、時事英語（毎日ジャパントイムスを読む）を担当された。厳しい先生だったが、

何人かに分けて家に呼んでくださって、卒業後も上京するときは友人と訪ねていた。二年時にアドグル役員を担当し、富士五湖に旅行した。先生の指導の下、青山祭で研究発表(展示)をした、等々。

自宅に招かれた話は、他にも複数の卒業生から印象深く語られた。C (1968 [昭和43] 年卒、国文) は、卒論は源氏物語であったが、先生の自宅まで訪ねていった。その際、「言いたいことだけをズバッと書きなさい」と言われたという。E (1969 [昭和44] 年卒) は英文科であったが、短大女声合唱団顧問の児童教育学科高橋好子先生のお宅に頻繁に訪れ、後に述べるように、そこで言われた一言(就職について相談した際の「銀行なんて辞めておきなさい」)がその後の人生に影響を及ぼし続ける(このことは4.2 (6) で詳述)。昭和40年代もその前の世代と同様に、授業、教室を越えた深い交流の中で、人格教育が行われていた時代だったと言える。

(2) クラブ、サークル活動

授業、教員の記憶がもちろん最も語られた内容であるが、上記のようにそれらは各自の歩みに大きな影響を与えるものであったので、次章において各卒業生の歩みを述べる中で、個別に取り上げることとする。ここではクラブ、サークル活動を列挙しておく。当時の学生生活の様子が目に浮かぶようである。

- ・四大の落研に入るがすぐ辞めて、短大クッキングクラブへ (A)。
- ・四大の愛好会「釣魚(ちょうぎょ)会」に。部室がないので四大の教会前のベンチに集まっていた (B)。
- ・書道部に入った。加藤楸邨先生が顧問。四大と合同で、桑原呂翁先生が指導としていらしていた (C)。
- ・四大のサークルには入らないように言われていた。短大バトミントン部に見学に行くがお楽しみクラブの様なので(高校時代にインターハイにおいて県で団体・個人とも優勝)、第二志望の女声合唱団に入った (D)。
- ・同じく短大女声合唱団。高橋好子先生が顧問、久住祐実男先生が指揮者であった (E)。
- ・映画研究会。青山祭で「私が棄てた女」「砂の女」を上映。後者については主演の岸田今日子に、ホテルオークラまでインタビューしに行く (H)。

(3) 時代を象徴する出来事

昭和40年代前半は、安保闘争など政治的にも激動の時代であったが、昭和という時代全体の節目であったと言えよう。A (1965 [昭和40] 年卒) は「オリンピックを見に行った。義兄が総理府に勤めていてチケットの割当があり、女子体操を見た。また新幹線が出来て、東京に行くのも早くなりましたね」と回想する。

4. 「しなやかに夢を生きる」人生ドーラ・E・スクーンメーカーからの継承

4.1 卒業後の進路

卒業後の進路は、就職はせずに（暫くして）結婚（2名）、東京で就職（3名、そのうち1名は短大副手）、地元で就職（3名）となる。昭和30年代に比較すると卒業後の進路の選択が広がってきているのが分かる。しかしなお地元に戻り、地元で結婚し、結婚と共に退職することが当然とされる傾向は強く、女性の生き方には縛りがまだ多かった。その中で、あるいはむしろその中でこそ、昭和40年代の卒業生の皆様もまた、逞しく豊かに人生を展開していらっしゃる様子に感銘を受けた。筆者には、その生き様は、青山学院のルーツの一つである女子小学校を創始したドーラ・E・スクーンメーカー（以下「ドーラ」という）の「しなやかに夢を生きる」生き方に重なって見えてきた。⁽³⁾ 本聞き取り調査の目的は「青山学院における女子教育の検証」である。それ故、以下、その原点となるドーラの生き方の継承という観点から、卒業生の歩みを確認してみたい。

4.2 「しなやかに夢を生きる」生き方の継承

(1) A（1965〔昭和40〕年卒、英文）は海外に行きたくて英文学科を選んだ。兼高かおるの番組を観て面白そうと思っていた、という。上述のようにAはシオン寮で生活し、松宮薫子先生アドグルの役員を務め（3.1（1）、3.2（1））、中学の英語教員免許も取得している。真面目によく勉学に励んだ学生であったことが窺われる。本当は東京で就職がしたかったけれど、自宅通勤という制限が多く断念し、卒業後、地元に戻り四国銀行に勤める。同行は高知の就職先としてトップクラスであり、そこにすぐに決まったことはさすがである。但し、自身の希望以前に、父親が願書を勝手に出していた、という。

本章冒頭で述べたように、昭和40年代は女子の高等教育、就職それ自体についてはかなり途が開かれるようになったが、進学先、就職先、さらに結婚を含むライフコースの自由の制約は、もちろん家庭によってレベルは異なるが、全体として大きかった。この願書の件についてもその例と言えよう。しかしAは決して受け身に留まる人生を送らない。青短英文科を選んだ動機であった「世界への関心」、そのために上京しようと決意した「積極性」はその後も失われることなく発揮される。Aは結婚前に、総理府主催第一回青年の船に乗った。銀行に勤めているとき、明治100年を記念して船を出して東南アジアの若者と交流するという目的であったが、「女を乗せない」というので問題になり新聞に載ったことで知り、応募した。団体推薦・県別推薦があり、男性200人女性100人で結果的にはやはり男女平等にはならなかった。高知からは男性2人女性1人（すなわちA）が参加。53日間の旅をし、現地レポートを書いた、という経験をなさっている。

またAは、結婚後、夫（医師）の仕事のため転居を重ねたのち、高知に戻って開業、子どもが大きくなってから、12年間、公文教室で高校生に英語を教えた。途中、夫の病気があったり、その復帰後も再開業した病院の事務を手伝って支えるが、その間も英語を教え

続けたという。さらに、コロナ前は外国人に日本語を教えるボランティアを始めた。残念ながら「コロナ禍」により生徒が集まらなくなって、この活動は2年ぐらいで終わってしまうが、Aは海外に行くのではない形で世界との関わりをダイナミックに展開するに至ったと言えよう。インタビュー最後の言葉は、今を「精一杯生きる」というものであった。

青年の船を通して海外に行きたいという夢を、現実の諸々の制約の中を生きるなかでも実現しきったこと。学校教員にはならなかったが、子どもたちに英語を教える働きを始めてずっと継続し、さらには今や、日本語を教えることで、社会に奉仕をする形で「海外に関わる」に至っていること（上述のように、そこにはシオン寮の基督教教育の影響も見て取れると思われる）。そのような人生の選択を重ねてきたAについて、インタビューをした教員（西山）は、「何かを始めることに対するおおらかな柔軟さをもち、そして決断を人に頼らない潔い自立心がしっかりと芯になっている方」と印象を語っているが、青山学院の女子教育という観点に照らしたとき、この生き方は、青山学院のルーツ、青短の女子教育の原点であるドーラ「しなやかに夢を生きる」生き方を、まさに受け継ぐものと言えるように思える。

（2）D（1969〔昭和44〕年卒、国文）は当たり前のように東京で働くつもりだった、と言う。この時期、依然として自宅通勤が条件の就職が大多数であったはずだが、その当時の常識を「当たり前」とせず、自分の生き方の中に働くことがしっかりと位置づけられ、「ぶれない芯」を持った若者であったことがわかる。ぶれない芯を持っている者には道が開けるものである。学校の掲示板の求人票で見つけた日本不動産研究所（日本勧業銀行による設立）に就職が決まる。当時、銀行は要・親元通勤であった。

そこで不動産鑑定部門の受付に配属されたのであるけれども、Dは一年で辞める。「やる気満々で入ったのに、受付って何するの？と思って。」1年は居てね、と就職課の人に言われたので、3月20日から働き始め、2月でスパッと辞めた。

新入社員を代表して社内報に新入社員研修の感想を書いたらそれがよかったらしく、目をとめられてその部署に配属されたという。恐らく、Dは、ずば抜けて優れた表現力を持っていたのだろう。会社からすると、そのような文章力、表現力を持っているDは会社の「顔」としてうってつけと思ったに違いない。しかしDは「顔」ではなく「中身」で仕事をするために就職したのである。辞表を出したとき「他にやりたい仕事はないか？」と課長に聞かれたが、「私がやりたい仕事がない」と言ったとのことである。見事な一言、「あっぱれ」である。これは当時の職場における女性の位置づけがよく分かる例である。

Dはその後、朝日新聞の求人欄で見つけた音楽製作会社で40歳代終わりまで働いた。お母さんといっしょ、みなしごハッチ、コマーシャル等々を扱い、出演交渉をしたり、スタジオを探したりで、夜10時になることもあった。でもそんなときは翌日は遅くていいよといわれたりして、「楽しかった」。コマーシャルの歌詞を書いたり、フィルムも回したり、

色んなことをやった。このように語るDは、「中身」のある仕事、自身が「中身」を作る仕事をやりきった充実感にあふれていた。

その会社が解散し、友人の設計事務所の手伝いの声がかかり、しばらく働くが、62歳の時、90歳を過ぎた母と同居するために愛媛に戻る。その6年後にお母様は大往生される。

Dは52歳から三味線を始めた。それは、民謡の先生をしていた母への親孝行として、伴奏してあげようかと考えて始めた。今も続けている。6年で藤本流の師範になり、今は年2回東京に教えに行っている。それは手弁当でまさにボランティアである。

「やりたい仕事がない」と会社に対し、面前で言い切ることができるのは芯がなければできないことである。しかし「芯がある」からこそ柔軟に、「しなやかに」生きることができる。Dは「中身」のある仕事を求め続けた。その中身の本質は、人と関わり、人と共に何かを作っていくことであるように思われる。とすれば、それは企業など組織での働きに限るものではなかろう。一人の人間、さらには一人の親族、親と向き合う場面においても、本質的には同じことが言えよう。「中身」のある仕事、すなわち中身のある「人との向き合い方」に不可欠な姿勢は、相手が大切にしていることに寄り添うことであると思われる。Dは、母の人生にとって大切な民謡に、三味線で寄り添った。しかしDの場合、その関わり方が中途半端でなく、本格的であることに驚く。6年で師範になり、教える立場になってしまうとは、その本気で向き合う姿勢、まじめさ、実力に脱帽である。ここでも「あっぱれ」の一言である。

もっとも、そのまじめさが、裏目に出ることもあった。短大時代に「出版社に入りたかったが、求人票を見ていたとき『四大卒、親元通勤』が条件だったので諦めた。親ではないが二人の姉と同居していたので、今は出せばよかったと思えるけれど、まじめに素直に従った。その時だけは、短大ではなく四大を出ておけばよかったと思った。四年制ならどこでもいいのかと、その時は悔しかったが。でも青短に行ってよかった。」何故青短に行っていたか。DはQ3「短大時代の記憶」の中で、卒論のために、夏休みに一人で前橋の萩原朔太郎記念館に行き、徹底的に調べて書き上げた経験（達成感）、国文科の川瀬一馬先生引率の能楽堂、加藤楸邨先生との研修旅行などで、本物と一流の学者に出会う経験を熱く語った。他の卒業生にも共通する本物、一流との出会い（後述（7））を通して培われた「自信」と世の常識に振り回されない視点の獲得が、その後の芯のある生き方を支えたからであろう。

表面でなくて中身を大事にして譲らない芯の強さ、真面目さ、強さ、と同時に優しさを兼ね備えたDの生き様もまた、「しなやかに夢を生きる」スクーンメーカーにつながるものとして響いてくる。

（3）昭和40年代においては、短大卒業後の進路として年々就職が多くなるが、しかし結婚退職というケースが主流と言ってよい。その中、定年迄までフルタイムの仕事を続け

たのは、Dの他はH (1972 [昭和47] 年卒、英文) である。Hもやはり、卒業後すぐではない形で、高松の地元放送局に就職し、そこで60歳の定年まで勤める。その会社では給料もよく、24.5歳で退職ということは無かったという。

Hは制作部では、地域のイベントの取材などをして番組を作った。事業部でバレー団を招いたときには、団員にはすごくスタミナが必要で甘い飲み物やお砂糖を買ってきた、といった思い出がある。人事異動がなく、高松から動かなくてよかった。女性の同僚はいたが、男女比は男性が圧倒的に多い。しかし深夜までの仕事は外してくれていたようで、子育てと家事と働くことが両立できた。保育所は遠かったが、保育所に迎えに行くから30分早く帰れるとかそういうことが出来たから両立できたのだろう。一応理解のある職場だったと思う。同じように子育てをしている同僚がいたから自分も続けられたのかも知れない。パートナーは全然違う業界の人だが、夫も理解があったこそ続けられた。そして「楽しかった」。

長く仕事を続けるためには、やりがいと環境が必要であろう。「楽しかった」と言い切れるやりがいのある仕事であるためには、上記Dと併せてまとめてみると、「中身」に関わる働きをすること、それを責任を持って担うこと、創造力を発揮できること、といった特徴を見て取ることができそうである。そしてHの話からは、そのための環境的条件が見えてくる。長く働きやりがいを持てる職場や職種が、次の世代においてどのように広がっていくか。あるいはそのような働きを卒業生たちがどのように「しなやかに」切り開いていくか。第三期の調査ではそのことも念頭に置いておきたい。

(4) B (1968 [昭和43] 年卒、家政) の場合、父に東京で就職してよいかと聞いたら「もってのほか」と言われ、実家に戻り洋裁などの花嫁修業をし、卒業した翌年に見合い結婚する。相手は父の同級会で話が合った建築関係の男性であった。もっともBは、そこで単に「嫁」に閉じることなく、子育てをしながら30歳位の時に、住居に直接関わる建築士の免許を取り、60歳まで働くのである。

元々薬学部に行きたくて高校では数学、化学、生物などを選択して勉強していたが、父親の花嫁修業のイメージで半強制的に短大の家政科に進学することになったというBは(上述2.3参照)、しかし青短家政科の、生活を科学的かつ総合的に学ぶ教育を受けることで、もともと持っていた科学的関心を生活全体へと広げていき、科学を生活に展開する総合的な知を獲得していった。そのなかで住居学と出会い、住居への興味が与えられる。授業それ自体が人生を変える契機になった例と言える。

これは家政科のカリキュラム改変とつながる話でもあるので、その点やや詳しく述べておきたい。昭和41年に家政科はA B二コース制に改変され、昭和42年にI IIコースと称されることになる。A (I) コースは生活の科学的理解 (生活科学コース)、B (II) コースは生活の社会的理解と創造的設計をめざす広義の生活デザインを内容とする (生活デザ

インコース)。⁽⁴⁾ 青短家政科はこの時期、被服科、調理科といったような他の大学の家政学部学科の展開とは一線を画し、生活の科学的・社会的・文化的な総合的理解を目指すカリキュラム大変革に着手したのであるが、Bはいわばその第1期生とすることができる。

Bは次のように当時受けた数々の授業の記憶を語る。曰く、Aコースに属し、担任は栄養学の西田寿美先生であった。阿部幸子先生の「被服整理学」で(当時幼稚園ぐらいのお子さんがいた、ということも記憶している)、例えば柔軟剤を入れると靴下が長持ちすることなども教わった。夏休みの宿題で、浴衣を仕上げて写真をとるという課題があり、これはわりと好きだった。今も思い出すのは、日本・西洋料理の野村万千代先生、大西セチ先生。教えていただいたおせち料理を今も作っている。そして深谷浩先生の「住居学」では、電気、間取り、設計の動線とかを教わった。結婚後建築士の免許を取ったのは、短大で与えてもらったその興味が続いたからで、学びが今も役立っている。

短大の時に与えられた興味が10年後に仕事として花開く。しかしそれは興味を仕事に、ということだけでなく、科学、家庭、社会を総合する生活の知の展開とすることができるのではないか。結婚し、子育てをする中で、家業である建築の仕事の本筋であるところの、科学的厳密さが求められる建築士として社会に関わる生き方は、まさに家政科がカリキュラム変革において目指した科学的総合的な「生活者」のあり方ではないだろうか。

さらにBは、娘が小学校に入ったとき(ちょうど建築士の資格を取得した頃と思われる)、PTAの「絵画部」に参加し絵を描き始める。その後県展で会員優賞をいただき審査員をやるようになる。今は市民展の審査員をやりつつ、日展・光風会展(静物)・県展(風景)・グループ展等、4つの作品を描いている。そして海外スケッチツアーに出かけて、イタリアやフランスの住民500人ぐらいの小さな村などに3,4泊滞留してじっくり絵を描く、ということも10数年行っている。

青短家政科は、上述の昭和41年カリキュラム変革において、科学、家庭、社会に加えて「文化」をもまた生活理解の柱に加える。例えば「美術・工芸」「色彩学」が科目として加えられていく(これは後述(7)で紹介するFの副手の仕事につながる話である)。Bは教養ある生活者育成への画期となるコース制の一期生として、青短家政科が育成を目指していた卒業生像の、最良のモデルとなり得る者である。

ストーリーはここで終わらない。薬学部は四年制大学なので行けなかったが、本当は行きたかったというBの思いを聞いた娘(昭和48生まれ)が、「それなら私が行く」と薬学部に進学したということである。時代の制約の中で、自らの夢は実現できなくとも、その夢は、次の世代で現実になっていく可能性を秘めている。

Bのこの話を伺ったとき、女子教育の「世代的継承」の大事さを思わされた。ドーラの「芯」となる夢(神の前に謙虚に生き人に仕えることに向けた、女性の、逆に言えば男性(を含め全ての人)の解放と自由)は、続く世代の「しなやかに夢を生きる」生き方を通して、さらなる次の世代へと、長いスパンを通して(この点でも「しなやかに」)実現さ

れていくものなのであろう。教育には、「想いが受け継がれる」ことを信じ、忍耐と希望を持続することが必要である。そのためには、そこに関わる一人ひとりが、Bのように、夢を支える「芯」になるものを見失うことなく、現実を「しなやかに生きる」ことが求められるであろう。

(5) C (1968 [昭和43] 年卒、国文) は、当時においてはかなり自由な家庭環境であった。卒業後、父が好きなことをしていればよいと言っていたので、自分で決めて「東京イングリッシュセンター」(渋谷) で英会話を2年学んだ。花嫁修業でなく、国文科卒業後英語を学ぼうとするCは、教養への志向を強く持っていたと言えよう。

23歳の時、父の薦めで見合い結婚した。結婚という点では完全に自由というわけにはいかなかったようである。もちろん本人の同意は尊重されたであろうが、父親同士が決めてしまい、9月にお見合い、12月には式だったという。「働いたことがないので、男の子を三人育てた、それだけです」と謙虚におっしゃるが、言うまでもなく子育ては大事な働きである(そして、息子三人とも社会的責任を担う働きをしっかりとっている)。Cはその働きに加えて、国際ソロプチミスト西リージョンの今治で30年、奉仕を続けてきた。

同団体のウェブページでは、『SOROPTIMIST』という言葉は、『女性にとって最良のもの』を意味し、ラテン語の『SOROR (sister/woman)』と、『OPTIMA (the best)』に由来します。ソロプチミストのビジョンは、女性と女兒が、自分たちの個々の、そして女性と女兒全体としての潜在能力を発揮し、憧れを実現し、世界中での力強く平和な地域社会の創出に平等な発言権を持つことです。ソロプチミストの使命は、教育、エンパワーメント、能力提供の機会を通して、女性と女兒の生活と地位を変えることです」と宣言されている。⁽⁵⁾ 短大同窓会四国支部では、何人もこの活動に関わっていらっしゃる。Cも「女性と女兒の生活のため」のボランティアとして、花を植えたり、バザーやチャリティコンサートなどの寄付事業を続け、理事と会長も何度か担ってきた。

Cは今治でこの活動が始まったとき、声をかけられて参加した。「一人でできることはささやかだけれど」そういう会に入っていたら、何かできるなと思い、子どもが手から離れた後に入ったという。「子育てしかしていない」と謙虚におっしゃるが、自身の子どものみでなく、日本さらには世界の子どもたち、特に女性、女子のために「ささやかだけれど」奉仕することを30年続けてきたことはそれ自体、短大の女子教育の伝統、スクーンメーカーの「夢」を正面から受け継ぐ生き方と言えよう。

支部総会には30回皆勤で、支部会長も務めたCは、The Best for Sistersのためのボランティア精神を、短大の中でも外でも発揮し続ける人生を送られている。

(6) E (1969 [昭和44] 年卒、英文) については、教員の一言が人生に影響を与える例として紹介したい。中一の英語の先生への憧れ、フルブライト留学されていた高3のクラ

ス担任の英語の先生の薦めで青短英文科に入ったEは、次のように述べる。

教職を取ったけれども「教育実習でークラス45,6人の生徒を自分に集中させることが出来なくて、それは今から思えば当然だが、その時には先生はやめる方がいいかと思った。」そこで卒業後、何か東京でできたらと思ったが、父が国家公務員だったので、柔らかな仕事が自分の頭の中に無かった。短大女声合唱団の顧問で、学科は違ったがお宅にもよくお邪魔していた高橋好子先生に、銀行に行こうと思うのですがとお話ししたら、「銀行なんてやめておきなさい」と言われた。

しかしながら、仕事といえば公務員か銀行員しか頭になかったというEは、短大に来ていた東京銀行に学校推薦をもらい、アメリカ大使館前の赤坂支店に配属された。場所柄、大使館員や商社の方の出入りも多く、忙しくはあったがカウンターの仕事で、人と話したり、銀行に出入りするお客様を観察できたことは有意義な時間だった、と振り返る。

高橋好子先生が何故「やめておきなさい」とおっしゃったか。一般的に、上記Dのケースでも現れるような、当時の企業等における女性の扱いに対する問題を感じていたのか。あるいは個別的に、教職課程を取って子どもたちに真剣に向き合っていたEに対するアドバイスとして、人間に直接接したいと思っている人はその思いを貫きなさい、と言いたかったのかも知れない。「やめておきなさい」の言葉の裏側には、あなたはあなたらしい仕事、働き（人と話したり、出入りしているお客様を観察できたことが有意義で楽しかったと述べるEのような者であるならば、人と直接関わりつなぐ働き）を「おやりなさい」という「押し出し」のメッセージが込められていたのではないだろうか。果たしてEはその後、銀行を退職して「やめる」ととどまることなく、新たに人と関わりつなぐ教育の働きを「やっていく」人生を、好子先生の暗黙のエールに応えるべく、展開していく。

就職後も、短大女声合唱団の指揮者だった久住祐実男先生が指導されていた混声合唱団に出入りしていたところ、Eは大学生だった夫と知り合う。夫の卒業後に結婚し、夫の勤務で高松に住むことになる。その後東京、神戸と転勤した後、子どもが小4の終わり頃、高松に再び帰ることになった。そこで英語を勉強し直そうと県の語学研修センターに通い始める。そのうち、子どもの同級生の親に、娘さんと一緒に英語を教えてくれないかと頼まれてプライベートで子どもたちに英語を教えるようになる。それがずいぶん長く続いた、ということである。ここでEの、教育者としての「第一歩」が始まったと言えよう。

更に話は続く。語学研修センターの英語の先生が、夏に海外研修生に対して日本語の基本を教えるのを手伝うこととなり、ここでEは日本語教師という仕事を知った。その後、外国人の子どもに小学校の授業時間中、別のクラスで、マンツーマンで日本語を教える仕事に出会い、自分は学校ではなくこの道かと思った。このようにして外国の若者、さらには外国につながる子どもたちを支え日本につなぐ、いわば「架け橋」としての教育者という「第二歩」が踏み出される。

そして、ある時、たまたま英語の先生のピンチヒッターとして英語を教えることがあり、次の年から英語も担当し、55歳位から小学校で15年ぐらい、英語補助教員を続けた。教育者としての「第三步」として、Eは自らが教壇に立つ教師に至る。そして（中一の時に憧れた英語教師との出会いから始まる）このダイナミックな展開を、「英語では助けられ、楽しませてもらっている」と締めくくる。Eは短大時代の教育実習の際には生徒を集中させられなくて悩みの中にあっただが、自分が何のために教育に携わりたかったか、ということとその後試行錯誤の中で見だし、外国人や外国につながる子どもたちをサポートして日本につなぐ、そして最後には教師として小学校の子どもたちを英語を通して世界につなぐという、（筆者の表現で言うと）「架け橋」としての働きに到達するのである。そのことで、教えることを「楽しむ」域にまで至ったというEからは、教育とは何か、教育者はどうあるべきかを教えられる。このEの、理解し合いつながりを深めていくことこそを根底に置く考えは、学生時代から一貫して持ち続けていたものであったと言える。それは、聞き取りの中で、英文科であったが日本文化も知らない、英語で多少単語が分かるくらいでは話ができないと考え、川瀬一馬先生の「花伝書」の授業も取った、という回想から見取れる。

さらにEは、言語の教育を通した架け橋に留まらず、地域と文化の架け橋となる働きも展開していく。音楽を通して結ばれた夫と二人で、地元で音楽の稽古場（「はしおか文化村」）を作る。「仕事を終えてから趣味を楽しみたいのに稽古場がない」という声があることを知って、先ずグランドピアノを置いた。そしてドイツ圏の民族楽器チターの演奏会も行った。また、劇団四季のファミリーミュージカルの全国公演で香川県が抜けているのは引き受け手がないからと言われたため、これも個人で主催を請け負った。子どもたちに本物の舞台を生で見せたいという思いで、平成元年まで続けたという。⁽⁶⁾

短大で培った英語、音楽を、人をつなぎ地域を活かすことへと大きく展開していったEに対して、高橋好子先生がご存命であれば、あるいは天国から、どうおっしゃるであろうか。いつも以上のこやかな笑顔をもって、「やめておきなさい」と言ったのは、こういう働きを「おやりなさい」の裏返しだったのですよ、とおっしゃるに違いない、と筆者は想像する。

Eの生き方もまた、宣教と教育を通して日本とアメリカの架け橋となったスクーンメーカーの、ままたらぬ現実を受け止め受け入れつつも夢を貫き続ける「しなやかに夢を生きる」生き方を継承するものであると言うことができよう。

（7）このように短大卒業生の人生の展開には、ドーラの「しなやかに夢を生きる」生き方が、脈々と受け継がれているように、筆者には思えてならない。それではその継承がなされるための柱となるものは一体何であるか。

大学においてそのビジョンを具体的に伝える役割を担うのは、教職員である。上で見た

ように、授業における教員との距離の近さ、ご自宅に招かれたり訪問する中での深い交流、さらには（全員ではないにしても）シオン寮という教育寮における寮監を中心とした共同生活が、戦前から昭和30年代、そして本報告で取り上げている昭和40年代の短大においても、濃淡はあるものの、青山学院の女子教育においては継続されている。それらを通した複数の教職員との人格的交流を通して、人はどのように生きるべきかというメッセージが、生きたものとして伝わっていったことが、聞き取り調査から分かる。ただそのことに加えて、そのメッセージが卒業生の人生を貫くものとして継承され維持されていくことに不可欠な要因として、「一流に出会うこと」「本物に出会うこと」があるように思われる。そして「本物に出会うこと」は実際に、筆者が先輩教員から、青短の教養教育における重要な柱であり、そのことを大事にしたい、と教えられてきたことである。

F（1970〔昭和45〕年家政卒、1971年専攻科卒）は家政科本科（Ⅱ生活デザインコース）を卒業し、専攻科を修了したあと、上述（4）の家政科のカリキュラム改変において、新しい領域を担当するために招かれた佐々木仁先生（デザイン）、茂木信明先生（住環境学）のうち、佐々木先生の副手となる。

副手は当時、二年交替で、卒業する人から指名されることが通例であった。Fもそこで選ばれた一人である。「デザイン画、陶芸、金工、時には染めもするし、本当に楽しいところでした」と振り返る。Fが青短家政学科を志望したのは、当時他にはなかった生活デザインのカリキュラムに魅力を感じたから、と言う。そして特に強調するのが、先生方が本当に一流であった、ということである。国文科でよく加藤楸邨先生等の名が出るけれど、生活デザインコースもまた東京芸大卒業の最高の先生方がおられ、だからこそ「本当に楽しかった」と繰り返す。（なお教養学科卒のGは、明治大学の友人から加藤楸邨先生の授業を受けさせて、と言われ、他学科であるが偉い人なのだと知ったという。後にGは地元の文化教室で俳句を選び10数年続けるという影響も受けている。）

「佐々木先生は愛妻弁当で『たたみいわし』がいつも入っていた。美味しそうだなあとデパートで買おうと思ったらとっても高いのね。先生金持ち、と思った」と、微笑ましいエピソードも語られる。短大においては、このような日常生活感あふれる交流の中で、一流の先生方との出会いが重ねられていったことが分かる。

F曰く、その後社会に出て趣味として、陶芸とか何をするにしても、短大時代の先生のレベルが高いから、全然打ち込めなかった、と言う。「何も出来ないくせに、偉そうな、嫌な人間になってしまった（笑）」といった冗談をおっしゃるぐらいである。そして、そのような教育を受けた短大の同窓生に対しての尊敬の思いを語る。一流の教育を受けた卒業生もまた一流であると感じているということであろう。ここに、人格的交流の中での一流との出会いを通した大学のビジョンの継承を見て取ることができる。

（8）最後に、教員の一言が人生に影響を与えた例をもう一人紹介したい。上述のようにG（1972〔昭和47〕年卒、教養）は入学後の変化として「初めて学生らしい講義を受ける

ことができた」ことを挙げたが（上述3.1）、その言を生み出すに至らせた授業は、特に小原信先生の西洋思想史であったと思われる。レポート50枚提出を課すこの授業は、聞き取り調査において、教養学科の他の卒業生からもよく語られる、妥協のないまさに本物で一流の授業である。Gは「記憶では100枚と思い込んでいた。あんな難しい内容をよく教えていただけた」、そして「感想文だったのがレポートになりました」と言われたことが嬉しかった、と述べる。

Gは地元に戻り四国銀行に就職をするが、その選択の理由は四国銀行は他行と違い、結婚後も務められる銀行だったからであり、漠然とは結婚しても仕事は続けたいと思っていた、と述べる。

結婚に関するエピソードにも、小原先生の一言が出てくる。曰く、新人交流会の感想レポートに「うまく書けてたね」と声をかけてくれた方と職場結婚した。西洋思想史のレポートでただの感想を書くものでは無いと学んだことが生きていたのだと思う（もっとも、夫となる男性はもう30歳近くで、結婚しなくてはという思いもあって声をかけてきたのかも知れない、と冗談も言いながら）。

銀行での仕事については、次のように述べる。曰く、本店の業務貸付課に配属され、頼まれたコピー取りが中心で、仕事に魅力を感じられなかった。支店だったらお客さんと対応して様々なことを学べたのかもしれないが。当時、夫が電算課に配属され昼夜無い仕事内容で、それもあり「やめてくれないか」と言われ、仕事に魅力を感じていなかったので「やめてあげる」と決断した。

結婚後も働けるという職場であっても、問題はやはりそこでの「中身」である。コピー取り中心の腰掛けの働き方は、一流の教師、学問に出会い、自立心と表現力と教養そして社会への目（上述3.1）を身につけたGにとっては、魅力的ではなかったことがよく分かる。

Gは3人目の子が幼稚園の時PTA会長を務め、小学校に上がってからも何らかの形でPTAに所属していた。学年部の部長の時、運動会後体育館でお酒が出る宴会が恒例だったが、学校でお酒が出るというのはおかしいと思ったので、おつまみやお酒の手配も進んでいたが、これはやめてもらった。反対の声も聞こえてきたが、私の名前でOKというのは嫌と思った。「そこは変な自信がある。」

Gの「自信」を持ったこの発言は重要である。青山学院の女子教育の目的はまさに、自信をもってこのような発言が堂々とでき、社会を変えていくことのできる「覚醒した女性」を生み出すことであるからである。⁽⁷⁾ ドーラの「しなやかに夢を生きる」生き方は、時代を超えて、多様な形で、確かに継承されていると言えよう。

5. 卒業生の人生にとって青短とは

青短に対する卒業生による評価については「Q4（学生当時）あなたにとって青短はど

んな場でしたか」「Q 6（今振り返って）ご自分の人生にとって青短とは」の二つの質問が問われた。それらに対する回答はある程度重なる内容となる。そこからキーワードとなり得るものを列挙してみよう。

先ずQ 4については、「青春」、「充実」、「一生の友達を得た」、「楽しかった」「勉強、授業が楽しかった」、そして「自由だった」、と続く。

Q 6については、「青春」、「（一生の友達との）「出会いの場」、「お友達が湧き出す泉」、一人でできることはささやかだが、つながっていることで何かできると思える（という仲間であることの）「安心」、人生の「ターニングポイント」（青短に行かなかったら全く違う人生になっていた）、「青短があったから今がある」、「誇り」「誇れる」、「自信」（人生における自信の源）となる。

これらのキーワードを結びつけてみると、「青短がどのように卒業生の人生に関わり支えるものになっているか」ということについて、やや強引かも知れないが、以下のように、一つの説明ができるように思われる。

青短時代が楽しい「青春」であったことは皆に共通する。それは短い二年、三年間であるが故に「充実」したものであった。そしてその楽しさは「自由」に由来するところが大きいと考えられる。但し、自由に遊ぶだけでなく自由に「学ぶ」青春であった。それ故、そこで自ら形成した人生の土台は「自信」の源となり得るものであった。学生時代に出会った友人は「一生の友達」となっていく。しかしその関係は単なる仲良しグループに留まらない。同時代を生きる女性として、励まし励まされ、支え合う「仲間」としての関係が生まれ、家族とも地域とも社会とも異なったレベルでの「安心」が与えられる（同窓会で多世代の先輩後輩と仲間としての関係が作られた場合には、その安心は増幅されることであろう）。卒業後様々な現実の問題にぶつかりながら、自らを信じて（「自信」）前を向いて生きていくとき、そのような自身の生き方を支える土台（青短）と、励まし合い支え合う仲間（同窓生）は「誇り」となる。それ故に、後から振り返るとき、青短の二年、三年間は人生の「ターニングポイント」と思えるのである。

6. おわりにードーラの生き方の継承という観点からの検証の試み

本稿の後半、特に4章については、聞き取り内容の紹介に留まらず、筆者の解釈をかなり加えた叙述となっている。これは、2023年度在外研究の機会を得たとき、研究と並行して、青山学院そしてその女子教育の原点であるドーラの一生に、現地に足を運んで向き合う一年を過ごしたことに影響を受けている。ドーラはイリノイ州グランディ郡ウィルミントン、シャナハンで育ち、8歳で宣教の意志を持ち、高校卒業後モリスで教師となって宣教に備え、1874年に奇しき導きにより23歳にして日本への宣教へと旅立った。私が一年滞在した大学が、このグランディ郡に車で二時間半程度の場所にあったため、頻繁に訪れ、

最終的にはモリスにある博物館にドーラの常設展示が実現するに至った。この思いもよらぬ展開については別稿 (本年報4号) にまとめたので、参照されたい。⁽⁸⁾

初めてモリスを訪れ、ドーラが教師をしていたセンタースクール跡 (現在歯科医院となっているが、当時の校舎の一部を残している) に立ったとき、体が震えたことを今も覚えている。150有余年前、この場でドーラは、子どもたちに授業をしながら、しかしまだ宣教師になることも行き場所も決まっていな中で、導きを求めて祈りを捧げていたのである。

その150有余年前のドーラの決意、祈りをどのように受け止め、継承するか。この観点抜きには、青山学院の女子教育の検証は (ひいては青山学院の未来を考える上でも)、有意義なものとはなり得ないだろう、少なくとも現地に立つ経験をした者はその観点からの検証に取り組む責任がある、と筆者は考えるに至った。それ故、棚村恵子先生のドーラ伝のタイトルである「しなやかに夢を生きる」生き方の継承という観点にこだわった叙述を、本稿で展開した次第である。この観点を抜きにしても、卒業生の皆様の魅力ある歩みの報告になっていると思うので、このような試論も許されると考えたのであるが、創始者の生き方と卒業生の生き方を照らし合わせるというこの検証のあり方についても、各位のご意見ご批判を賜ることができればありがたい。

(1) 河見誠「青山学院女子短期大学四国支部卒業生 聞き取り調査のまとめ-1956 (昭和31) 年から1965 (昭和40) 年卒まで」『スクーンメーカー記念ジェンダー研究センター年報3号』(2024年3月) 93頁に記載の卒業生 I (1962 (昭和37) 年卒) 参照。

(2) 藤沢真理子「賀川豊彦と東京帝国大学セツルメント」『東邦学誌』第48巻第1号、2019年6月、16頁。

(3) 棚村恵子『しなやかに夢を生きる-青山学院の歴史を拓いた人 ドーラ・E・スクーンメーカーの生涯』(青山学院、2004年)。河見誠「ドーラ・E・スクーンメーカーの『しなやかに夢を生きる』生涯-グランディ郡歴史協会博物館による常設展示開始-」『キリスト教と文化: 紀要・青山学院150周年記念特別号』第40号別冊 (2025年3月) 93-114頁。後者の拙稿では、ドーラのしなやかな生き方は、愛の基準に基づき、夢と現実「両方とも選択する」生き方である、と解している。すなわち「遠くの人 (日本) に仕え愛する生き方は夢として捨てない。しかし、最も身近な人にも仕え愛する生き方、これも現実として捨てない。5年という条件 [海岸女学校まで立ち上げつつも母のために帰国する] は、その狭間で悩みつつも、夢と現実「両方とも選択する」という、不評を覚悟での選択だったのではなかろうか。」(113頁)。

(4) 『青山学院女子短期大学の歩み』(青山学院女子短期大学、昭和50年) 118頁。

(5) <https://sia-nishi.com/west/index.html>

(6) 『青山学院女子短期大学同窓会報』33-春号 (2007年4月25日) 5頁 (Who's Who)。

(7) <青山学院女子短期大学の教育理念>

女子短期大学は、青山学院のキリスト教の信仰にもとづき、「女子小学校」から「青山女学院」

を経て現在に至る本学院の女子教育の伝統を継承し、女子の高等教育に専念する。本学は、愛と奉仕に生き、社会のあらゆる局面で積極的な貢献をなし得る覚醒した女性の育成を目指し、現実に応じた有用な専門の学芸のみならず、全人的で世界的な視野に立つ高度な教養教育を授ける。

＜青山学院女子短期大学学則第1条＞

青山学院女子短期大学は、青山学院にある幼稚園から大学に至る各学校と相たずさえ、キリスト教の精神にしたがって女子の教育に専念する。即ち、「地の塩、世の光」として社会に貢献し得る覚醒した自立的な心を養うとともに、高度な教養と実際に役立つ専門の学芸とを授けて、愛と奉仕に生きる人物を育てることを目的とする。

(8) 河見誠「スクーンメーカーが蒔いた『宣教の種』150年後の実りーグランディ郡歴史協会博物館ドーラ・E・スクーンメーカー常設展示に至る経緯ー」『スクーンメーカー記念ジェンダー研究センター年報4号』（2025年3月）26-45頁。